夏冬Thirty Wars

グーメアー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏冬Ｔｈｉｒｔｙ Ｗａｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ２７２６ＢＡ

【作者名】
グーメアー

【あらすじ】
人の意識を仮想空間へ送り込む計画”ＶＨＳ計画”。夏休みの３０日間を利用して実験の被験者となった月宮　太陽と愉快な仲間達。”絶対安全”を掲げていた仮想空間だったが、突如現れたエラーによって、絶対安全の仮想空間が戦場へと姿を変えてしまった・・・。

プロローグ

「・・・はっ！」

朝、けたたましく鳴り響く目覚まし時計の音に気づくのに数分かかってしまった。

朝ってのは本当に残酷だ。大事な時間を忘れさせるほどに快適で優しい空間を俺に提供してくれるのだから。

・・・おかげで遅刻だ。

ベッドから飛び降りて目覚まし時計を叩きつけて音を消す。多分逝った。

すぐさま学校の制服に着替えて部屋を出て居間に直行。母の言葉をスルーして食パンをくわえて家を出る。その間わずか一分。

いつもなら学校は重役登校をするのだが、今日は遅れてはならない理由があった。

「おぉ～い！太陽！」

後ろから聞こえる声。俺と同じく遅刻常習犯の男が並走してきた。

「確か今日の放課後だったよな！？」

「そうだよ！だから遅れるわけにはいかないんだろうが！」

「同じく〜！」

マラソンのように走る俺とこいつ。パンをくわえてる俺にはハンデがあるのだから、俺のポテンシャルが誉められるべきなのだ。

「よっしゃあ到着！一分前！」

全力で走ったおかげで、今日は学校に遅れないで済んだ。

チャイムが鳴る前に靴を履き替え、教室に入る。

「朝から汗びっしょりだね〜！」

「もう・・・たまには早く起きれば？」

迎え入れてくれたのは、同じクラスの速水（はやみ）　翼（つばさ）と法崎（ほうさき）　斗魔（とうま）。そして迎え入れられた俺、月宮（つきみや）　太陽（たいよう）と後ろの大空（おおぞら）　剣吾（けんご）。

迎え入れられたと同時にチャイムが鳴り、席に強制連行。教師が話始めた。

「明日から夏休みだからといって勉学を疎かにしないように！今から宿題を配るぞ！」

途端に飛び交うブーイングの嵐。それを横目に、俺達四人は再度確認した。

「今日帰ったら、すぐ太陽ん家に集合な。」

「「「おっけ〜い！」」」

再度前を向くと、大量の宿題なるものが俺を見つめていた。

とある計画

終業式が終わって速攻帰宅。すぐさま着替えて家を出る。その間わずか三分。

「遅いぞ太陽！間に合わないぞ！」

「おぅわりぃわりぃ！」

すでに待っていた三人と自転車を飛ばす。

向かうのは、高くそびえるアロー財団の所有しているタワーだ。

アロー財団が記者会見を行ったのは一ヶ月くらい前だ。その内容は至ってシンプル。とある計画の被験者を募るって内容だった。

その計画というのは、人の意思を仮想空間にデータ化(よくわからんが)して送り込むっていう話だ。この計画が成功すれば、ゲーム会社と提携して体感型ゲーム機や自分をアバターとするオンラインゲームやＳＮＳ(ソーシャル・ネットワーク・サービス)の開発。

医療業界からは模擬手術等の研究生の実践練習の開発。

アパレル業界からは服の試着や購入の短縮化等々。

つまりは夢のような世の中になるような計画だということだ。

その被験者は、一般公募から百人、ネット公募から百人、業界公募から百人の計三百人。

俺達は一般公募から選ばれて、今日、その計画の実験で呼ばれたというわけだ。

学校に遅刻してはならない理由は、遅刻すると反省文を書かされるからだ。

事前に渡された資料によると、遅刻者は被験者リストから外されるらしい。怖い怖い。

そんな訳で、俺達は速攻でアロー財団タワーに向かった。

VHS

アロータワーに着くと、黒い制服の人が中に誘導してくれた。何だが裏カジノにでも入ってる気分だ。

「こちらです。」

促されるままにどでかい扉を潜ると、大ホールに大量の人が立っていた。どうやら俺らが最後みたいだな・・・。

「あ～、コホン。被験者の方も全員集まったことですので、そろそろ企画説明に参りましょうか。」

壇上に白い髭を生やした黒服白髪のおっさんがマイクを持って上がった。

「被験者の皆さん！この度はアロー財団の企画した”ＶＨＳ計画”のテスト企画に参加していただき、誠にありがとうございます！」

ＶＨＳ？ビデオか何かか？よくわからん。

「具体的な内容は後程説明しますが故、皆さん、これから私の後についてきてください！」

そう言って、おっさんは壇上を降りて奥に歩いていった。ぞろぞろとついていく人達に合わせて俺らも歩く。

―――――――――――

たどり着いたのは、真っ暗な部屋だった。

「コホン。皆さん！これが我がアロー財団が開発した意識転送装置！”ＶＨＳ”です！」

どっから出てるかわからないスポットライトが焚かれ、姿を現したのはどでかい卵みたいな奴だった。ゲーセンで似たような奴を見たことがあるが・・・気のせいか？

「三百人分ご用意していますので、どうぞ皆さん、お好きなＶＨＳにお乗りください。」

その瞬間、三百人が押し合い圧し合いでＶＨＳに乗り込んでいく。あっという間に一杯になったＶＨＳ。空いたのは端にある四つだけ。

「俺たちも乗ろうぜ、太陽。」

促されるままに、四つの一番端に乗る俺。案外座り心地が良い。

「皆さん！頭の上にあるヘルメットを頭の位置まで下げてください！」

あぁこれか。目の位置に何か眼鏡みたいなのがついているヘルメットだ。

下げてヘルメットを被る。すると、急に視界がぼやけてきた。

「これから転送が始まります！揺れるかもしれませんがご了承ください！」

いやいや！揺れるとかの騒ぎじゃないぞ？振り回されてるようにぐるぐるする視界。まるでミキサーの中みたいだ！オェ～・・・。

気持ち悪すぎて視界が真っ暗になった。その瞬間、変な浮遊感が襲ってきた。

何か虹色のトンネルみたいな所を泳いで通ってる感覚がする・・・っていうか虹色のトンネルが見える。

次第に真っ白な光が見えてきて、俺はその光に向かって急降下していった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2726ba/

夏冬Thirty Wars

2012年1月7日01時47分発行